

# コンラート・アデナウアー暗殺未遂事件：賠償を阻止するための陰謀

第二次世界大戦後の西ドイツ初期、初代首相コンラート・アデナウアーは、荒廃した国を再建し、国際社会での地位を回復させる重要な人物として浮上した。熱心な反ナチスで敬虔なカトリック教徒であるアデナウアーは、1949年から1963年まで西ドイツを率い、民主主義、経済回復、かつての敵国との和解へと導いた。しかし、ホロコーストの残虐行為に対するイスラエルへの賠償交渉の取り組みは、彼を過激派の標的にした。1952年3月27日、アデナウアー宛の小包爆弾がミュンヘン警察本部で爆発し、警察官1人を死亡させ、イスラエルの過激派メナヘム・ベギンに関連する衝撃的な暗殺計画を暴露した。この記事では、この大胆な首相暗殺未遂の背景、実行、余波を探り、冷戦史のあまり知られていない一章に光を当てる。

## コンラート・アデナウアーと賠償協定

1876年にケルンで生まれたコンラート・アデナウアーは、ナチズムに反対した経歴を持つベテラン政治家だった。ヴァイマル共和国時代にケルン市長として、ヒトラー政権に抵抗し、投獄され、戦争中は隠遁生活を送った。1945年後、彼はキリスト教民主同盟（CDU）を共同創設し、1949年に西ドイツ初代首相となり、廃墟となった国を再建する任務を負った。彼の外交政策は西側との統合と、フランスや米国を含むかつての敵国との和解を優先した。彼の道徳的・外交的アジェンダの基盤は、ホロコーストに対するドイツの責任を扱うことだった。

1951年、アデナウアーはイスラエルとの賠償協定交渉を開始し、ホロコースト生存者と新興ユダヤ国家への財政的補償を提供することを目指した。1952年9月のルクセンブルク協定で正式化された交渉は、非常に論争を呼んだ。ドイツでは、一部が賠償を経済的負担や集団的罪の認めと見なし、イスラエルでは多くの人々がドイツからの金銭受け取りを拒否し、600万人のユダヤ人虐殺に責任のある国家を正当化するものと見なした。過激派グループ、特にシオニスト準軍事組織イルグンに関連するものは、協定をホロコースト被害者の裏切りと非難し、生存者が直接支払いを受け取るべきで、国家建設プロジェクトのためのイスラエル政府経由の資金ではないと主張した。

## メナヘム・ベギンとイルグンとのつながり

暗殺計画の中心にいたのは、イスラエル史の巨人で、後に1977年から1983年まで首相を務め、1978年のキャンプ・デービッド合意でノーベル平和賞を共有したメナヘム・ベギンだった。1952年、ベギンは修正主義シオニズム運動に根ざす右翼政党ヘルートの指導者で、パレスチナでの英国軍に対する攻撃を担当した国家成立前の民兵組織イルグンの元司令官だった。家族がホロコーストで亡くなったベギンは、賠償協定に猛反対し、ドイツが「赦し」を「買う」ことを許す道徳的妥協と見なした。

ベギンの反対は単なる修辭的ではなかった。後の暴露によると、彼は賠償交渉を脱線させるためにアデナウアー暗殺計画を積極的に支援した。計画は、イルグン元メンバーの小グループによって組織され、エリエゼル・スディトを含む彼は、数十年後に出版された回顧録

『Be'shlihut Ha'matzpun』（『良心の使命で』）で関与を詳述した。スディトの説明は、2003年の書籍『アデナウアー暗殺未遂：政治的攻撃の秘密史』でドイツ人ジャーナリストのヘニング・ジーツによって裏付けられ、ベギンの承認、資金提供、計画の中心的な役割を明らかにした。

## 陰謀の展開

暗殺未遂は大胆かつ素人っぽかった。1952年3月27日、アデナウアー首相宛の荷物がミュンヘン警察本部に到着し、子供っぽい筆跡と誤った宛先で疑いを招いた。百科事典の中に隠された爆弾が入った荷物は、陰謀者によって雇われた2人のティーンエイジャーによって郵送された。何かおかしいと感じた少年たちは、郵送する代わりに警察に通報した。警官が荷物を検査しようとしたところ爆発し、バヴァリア警察官のカール・ライヒェルトを殺し、2人を負傷させた。

同時に、イスラエルとドイツの代表団が賠償交渉を行っていた会場に2つの追加の手紙爆弾が送られ、自らをユダヤ人パルチザン組織と称するグループが責任を主張した。これらの爆弾は標的に届かなかったが、ミュンヘンの爆発は国際調査を引き起こした。フランスとドイツ当局は、計画をパリでの5人のイスラエル容疑者に遡り、全員がイルグンに関連していた。その中には爆発装置を準備したと認めたエリエゼル・スディトがいた。容疑者は逮捕されたが、後でイスラエルに戻ることを許可され、ドイツでの反ユダヤ感情を煽らないよう証拠は封印された。

1990年代に出版されたスディトの回顧録は、計画の動機と実行に関する重要な洞察を提供した。彼はアデナウアーを殺す意図ではなく、国際メディアの注目を集め賠償交渉を妨害することだったと主張した。「我々全員に明らかだったのは、荷物がアデナウアーに届く可能性はないということだ」とスディトは書き、計画が象徴的な行為として設計されたことを示唆した。しかし、この主張は議論的で、ベギンの関与と致命的な結果―警察官の死―はより深刻な意図を示唆する。スディトはベギンの個人的な献身を語り、金が不足したときに金時計を売る提案や、クネセト議員のヨハナン・バデルとハイム・ランダウ、元イルグン情報部長アバ・シェルトゥアーとの会議で計画を調整したことを述べた。

## 余波と隠蔽

アデナウアー指導の下で西ドイツ政府とイスラエル首相ダビデ・ベン＝グリオンは、両国とも脆弱な二国間関係を維持するため事件を軽視しようとした。アデナウアーは計画の起源を知っていたが、ドイツでの反ユダヤ的反発や賠償の脱線を恐れ、積極的に追求しなかった。賠償協定を支持したベン＝グリオンは、アデナウアーの自制を感謝し、ベギンの関与の公表は新興のドイツ・イスラエル関係を緊張させる可能性があった。詳細は2006年まで大部分が抑圧され、『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトUNG』がスディトの回顧録の抜粋を掲載し、新たな関心と議論を呼び起こした。

イスラエルでは、ベギンの役割は数十年間不明瞭だった。彼の個人秘書のイエヒエル・カディシャイとメナヘム・ベギン遺産センター所長のヘルツル・マコフは、2006年に質問された際、計画の無知を主張した。しかし、スディットの説明はジーツの研究で裏付けられ、ベギンの関与に疑いの余地を残さなかった。この暴露は、ベギンの後の平和主義者の地位を考慮してアナリストを震撼させ、ホロコースト後時代の政治的暴力の倫理に関する疑問を提起した。

暗殺未遂は1952年9月に署名された賠償協定を脱線させるのに失敗した。西ドイツは当初、イスラエルに約30億ドイツマルク、請求会議に4億5000万を支払い、新たな請求で支払いが継続した。協定はイスラエルの経済を強化し、ドイツの道徳的清算の重要なステップを標したものの、論争が続いた。アデナウアーの生存と決意は彼の国内・国際的地位を強化し、1953年の再選に寄与した。

## 遺産と歴史的意義

コンラート・アデナウアー暗殺未遂は、ホロコースト後時代の生々しい感情と複雑な政治を強調する。ベギンとその同盟者にとって、賠償協定はユダヤ人の苦しみの裏切りを象徴したが、彼らの暴力的反応はイスラエルの道徳的権威と外交目標を損なうリスクを負った。アデナウアーの事件抑圧の決定は、透明性の代償に和解への実用的コミットメントを反映した。この事件は、また、虐殺の影での正義、記憶、国家利益のナビゲーションの課題を強調する。

今日、この陰謀はアデナウアーとベギンの遺産の脚注で、後年の業績によって影が薄い。アデナウアーは現代ドイツと欧州統合の創設父として称賛され、ベギンはエジプトとの平和確保の役割で記憶される。それでも、1952年の試みは、イデオロギー的分断と歴史的傷が極端な手段を駆り立てた初期冷戦時代の不安定さを思い起こさせる。それはまた、政治的暴力の倫理と過去の残虐行為への対処における外交の繊細なバランスについての反省を促す。

歴史家モシェ・ツィーマーマンが述べたように、陰謀の秘密はドイツ・イスラエル和解を守る相互の願望によって駆り立てられた。その遅れた暴露は、スディットの回顧録と後続の報道を通じて、生存者、政治家、過激派がホロコーストの遺産と深く異なる方法で格闘した時代の道徳的曖昧さに取り組むよう誘う。